

自己有用感を高め、主体的に学級や学校づくりに参画する児童の育成
—特別活動を基礎とした教科横断的な学びやSEL－8Sの実践を通して—

うるま市立 天願小学校

教諭 長嶺 利奈

I テーマ設定の理由

今日、児童を取り巻く環境は、高度情報化社会の伸展やグローバル化、AI技術の発展など、複雑で予測困難な社会になっている。また、感染症対策のためのマスク着用やソーシャルディスタンス運動による、コミュニケーション時に必要な表情の読み取りや、対面で行うコミュニケーションの場面がこれまでよりも著しく減少した。ニッセイ基礎研究所が2021年12月に実施したインターネット調査「第7回 新型コロナによる暮らしの変化に関する調査」*¹の中の、コロナ禍における他人との交流機会の変化や、人間関係に関する不安、個人の孤独・孤立感に関わる調査結果では、コロナ禍によって、家族や友人と会って話す機会が減った人が20代～70代の2543名のうち4割を占め、1人で過ごす時間が増加した人が3割に上るなど、人との関わりが疎遠化していることが分かった。そのことにより、老若男女問わず「社会性の基礎となる部分」すなわち「人と関わりたい」という意欲そのものが低下し、家庭や地域、学校においての人間関係での交流が減り、児童間の対人関係づくりの弱さや仲間意識の薄れに影響を与えていると感じる。そのため「あいさつができない」「人との約束が守れない」といった“社会性”と関連するする能力が低下し、児童のストレスは増加し、学校現場においてもいじめや不登校など、生徒指導上の問題が多くなっている。これらの問題を解決するためには、他者との関わりを通じた自己有用感の獲得が必要だと考える。「自分でもできる」という自己への信頼感や自信、集団の一員としての社会性が身につくだけでなく、自分は価値のある人間だということを理解する「自尊感情」を高めることにもつながると考える。この予測不可能な現代社会を生き抜くためには、他者と協働し、自己の良さを自覚しながら自己実現を図り、社会へ参画しようとする態度を身につけることが求められている。

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説「特別活動編」では、「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせながら「様々な集団活動に自主的に実践的に取り組み、互いのよさや可能性を發揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決すること」を通して、資質・能力を育むことを目指す教育活動であると示されており、三つの視点で整理されている。一つ目は、違いを認め合い、みんなと共に生きていく「人間関係形成」の視点、二つ目は、なりたい自分に向けて頑張る「自己実現」の視点、三つ目は、よりよい集団や社会をつくろうとする「社会参画」の視点である。

また、本県の令和4年度版「学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ ～学びの質を高める授業改善・学校改善～」では、学力向上の統括的目標を「幼児児童生徒一人一人に「生きる力」の基盤となる「新しい時代をつくる為に必要とされる資質・能力」を育む」としており、特別活動で求められている資質・能力の向上が、これから生きていく児童生徒に重要だということが分かる。

そこで、本研究では、自己を価値あるものと受け入れる感覚をもつための手立てとして、自己への捉えと他者との関わりを基礎とした、社会性（対人関係）に関するスキル、態度、価値観を身につける学習である社会性と情動の学習（以下、SEL8－Sとする）を特別活動と関連づけ授業実践に取り組んでいく。それらを通して、学級をはじめ学校生活全体の中で自らの大切さや他の人の大切さが認められていることを児童生徒自身が実感できるような場面を意図的に設定していきたい。また、主体的に学級や学校づくりに参画する児童への手立てとして、学級での学級活動（1）での話し合い活動や学級活動（2）での係・当番活動、児童会活動でのたてわり班活動に取り組んでいくことで、特別活動を基礎とした教科横断的な学びやSEL－8Sの実践を通して、自己有用感を高め、主体的に学級や学校づくりに参画する児童の育成を目指していくことができるであろうと考え本テーマを設定した。

II 研究仮説

仮説1 特別活動で身につけたい資質能力とSEL－8Sを関連付けて授業の工夫を行うことで、個々の児童のSEL8－Sにおける基礎的・社会的応用能力の向上を図ることができるだろう。

仮説2 特別活動での学級活動や係活動、委員会などを通して、主体的に学級や学校づくりに参画するために必要な、自己有用感を高めていくことができるだろう。

III 実践内容

1 自己有用感について

国立教育政策研究所「生徒指導リーフ（leaf18）」*²では、「人の役に立っている、人から感謝された、人から認められた」という、相手の存在なしには生まれてこない感情であり、「『自己有用感』は自分と他者（集団や社会）との関係を自他共に肯定的に受け入れられることで生まれる、自己に対する肯定的な評価」としている。本研究における「自己有用感」とは、他者との関わりを通して評価を高めることができ、自己を受け入れる感覚であると定義し研究を進めていく。

¹ 「コロナ禍における人間関係の疎遠化と孤立・孤独 「第7回 新型コロナによる暮らしの変化に関する調査」より」坊 美生子（2022年3月19日）ニッセイ基礎研究所HPより

² 国立教育政策研究所「『自尊感情』？ それとも、『自己有用感』？ Leaf.18（<https://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf18.pdf>）

2 自己有用感の必要性

自己有用感は「人（他者）と関わりたい」という気持ちが根底にあると考える。その気持ちは、自らの体験によってのみ、獲得される。他の子と一緒に遊んだりすることを通して「人と関わって楽しい」「人と関わる事は苦痛でない」と感じるところから「他者との関係性」が始まり、その積み重ねが、「社会性の基礎」を形づくっていく。自己肯定感と類似するものとして、よく用いられているのが「自尊感情」という言葉がある。「自尊感情」が「自分に対する自己評価が中心」なのに対し、「自己有用感」は「自分に対する他者からの評価が中心」である。「人の役に立った」「人から感謝された」「人から認められた」といった、相手の存在なしには生まれてこない点で、自尊感情とは異なっている。（文部科学省 国立教育政策研究所 2015 生徒指導・進路指導研究センター「生徒指導リーフ『自尊感情』？それとも、『自己有用感』？（leaf18）」より）自己有用感が高まると、自分が社会の一員であることを自覚するので、規範意識が醸成される。そのことにより、いじめの原因となる児童生徒のストレスが生まれにくくなり、学級や学校が児童生徒にとって安心できる居場所づくりになることから、いじめや不登校の未然防止にも繋がると考える。

3 主体的に学級や学校づくりに参画する児童について

「自己有用感を高める」とは、他者との関わりを通して自分を価値あるものとして受け入れる感覚をもち、自分と他者（集団や社会）との関係を自他共に肯定的に受け入れ、自己に対する肯定的な評価ができるということだ。また、文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター「特別活動指導資料 みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）」では、「主体的な学び」とは、学級や学校における集団活動を通して、生活上の諸課題を自分たちで見出したり、解決できるようにしたりすることだと示されている。

4 特別活動を基礎とした教科横断的な学びについて

文部科学省（4）「カリキュラムマネジメント」の重要性では「これからの時代に求められる資質・能力を育むためには、各教科等の学習とともに、教科横断的な視点で学習を成り立たせていくことが課題となる。そのため、各教科等における学習の充実はもとより、教科等間のつながりを捉えた学習を進める観点から、教科等間の内容事項について、相互の関連付けや横断を図る手立てや体制を整える必要がある。」と述べられている。また、小学校学習指導要領（平成29年告示）解説「特別活動編」では、「特別活動の指導に当たっては、各教科、道徳科、外国語活動及び総合的な学習の時間などの指導との関連を図る必要がある」とし、特別活動の見方・考え方を要とした教育活動の実践が求められている。

5 SEL-8S

『社会性と情動の学習（SEL-8S）の進め方 小学校編』（小泉、山田 2011）によると、SELは社会性と情動の学習（Social and Emotional Learning）の頭文字であり、「自己の捉え方と他者との関わり方を基礎とした社会性（対人関係）に関するスキル 態度 価値観を身につける学習」だと定義されている。また、SELとは、特定の心理教育プログラムを意味するのではなく、心理学の考え方や研究成果などを基盤とした学習プログラムに合致する数多くの心理教育プログラムの総称であり、その中で学校における8つの社会的能力³の育成を目指した特定の学習プログラムを、SEL-8S学習プログラムとしている。（別紙参照p11）

IV 指導の実際

1 本研究対象学級の実態調査

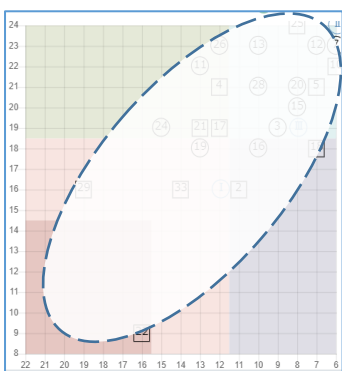
(1) WEBQ-U

① 調査目的及び対象・日程

本研究を実施するにあたり、児童の実態を把握するため第1回目のWEBQ-U⁴を実施した。（2022年6月20日実施） 本学級に在籍する男子17名、女子16名の計33名に児童に実施した。

② 結果及び分析

図1は学級の児童それぞれの「学級生活満足群」「非承認群」「侵害行為認知群」「学級生活不満足群」「要支援群」を表している。全体的に学級に満足できている児童（学級生活満足群）が17名となり、非承認群領域に3名、侵害行為認知群に6名、学級生活不満足群領域に5名、要支援群領域に1名所属しているという結果になった。1回目の学級満足尺度の結果は「かたさ型—固定—遂行」となった。小グループ内では仲が良いというグループが形成されており、児童生徒間にヒエラルキーが見られ、学級内で認められている児童生徒とそうでない児童生徒が存在し、固定化する傾向があった為、不安なく関われる少人数での活動場面を全教科で場面設定し、認め合える雰囲気づくりに努めた。



1回目「かたさ型—固定—遂行」
図1 WEBQ-U 6-3分布図（6/20実施）

³ 資料1「SEL8-S 8つの能力」

⁴ QUとは早稲田大学の河村茂雄教授が開発した、学校・学級生活への不適応、不登校、いじめ被害の可能性の高い子どもを早期に発見することで、いじめを無くし、児童生徒にとって充実した学校生活を送れる環境を整えるための心理テストである。

(2) SEL-8S 児童アンケート

①調査目的及び方法・対象・日程

SEL-8S実施前の8つの社会的能力を測定するため、「SEL-8研究会」ホームページに公開されている「学校生活についてのアンケート【小学生用】」26問のアンケートを、2022年6月13日に 本学級に在籍する男子17名、女子16名の計33名に児童に実施した。

評価項目	1回目
① 自己への気づき	49.7
② 他者への気づき	51.7
③ 自己コントロール	54.2
④ 対人関係	50.7
⑤ 責任ある意思決定	49.4
⑥ 生活上の問題防止のスキル	45.4
⑦ 人生の重要事態に対処する能力	49.2
⑧ 積極的・貢献的な奉仕活動	46.9

表1 SEL-8S「学校生活についてのアンケート」結果

② 評定結果及び分析

アンケートでは、①～⑤を基礎的社会的能力とし、⑥～⑧を応用的社会的能力と評価項目としている。本研究のテーマ「自己有用感」と関連する基礎的社会的能力の「他者への気づき」「対人関係」「責任ある意思決定」が、平均値を下回る結果となった。このことから、自己の感情や気づきを感じるスキルがまだ不十分だと考えられる。自己有用感をもつ以前に、自分の感情に気づき、自己の効力について現実的で根拠のある評価をする力を高めていかなければならないと考える。自己への気づき（自分自身の感情や行動について）を高めることで、その他の基礎的社会的能力や応用的社会的能力の向上につながると考える。基礎的社会的能力や応用的社会的能力それらと関連するすべての要因と、色々な選択肢を選んだ場合に予想される結果を十分に考慮し、他者を尊重し、自己の決定について責任をもつ力である「責任ある意思決定」の数値の向上が、主体的に学校や学級づくりに参画する児童の育成に繋がると考える。

2 実践事例

(1) 検証授業1 (特別活動 学級活動 (2) 2022年6月15日)

① 題材名 ストレスとの上手な付き合い方～日々を楽しく過ごすために～【(2)-ウ 心身ともに健康で安全な生活態度の形成】

【SEL-8S】 E5 わたしの対処法 (ねらいとする能力: 自己への気づき 自己のコントロール)

② 題材の目標

自分の健康の課題について、アンケートや資料をもとに、健康の大切さに気づき、仲間との話し合いを通して、自分に適したストレス対処法の仕方を実現できる実践方法を考え、目標を設定し、意識して実践することができる。

③ 本研究との関連

本研究のテーマは、「自己有用感を高め、主体的に学級や学校づくりに参画する児童の育成—特別活動を基礎とした教科横断的な学びやSEL-8Sの実践を通して—」である。そこで、学級目標の一つである「思いやりがあって、自分や友達を大切にできる子」と関連付け、自己有用感を高めるための始めの手立てとし「自分自身の感情や考えに気づく力」という、自己への気づきを高めていく授業づくりに取り組んでいく。

④ 本時の展開

(1) 本時のねらい

健康の大切さを理解し、ストレスを解消する方法を考え実践することができる。

(2) 本時の展開

観点	児童の活動	◎指導上の留意点 (観点)【評価方法】	備考
導入 つかむ	1, ストレスがかかる場面とは? T:みんなはどんな時にイライラしたり、モヤモヤしたりストレスがかかる? T:今回は色々なストレスの場面とその対処法や、自分にあった方法は何か考えていこう。	・事前のアンケートから、ストレスとを感じる場面を共有し、課題を自分事としてとらえることができるか。【知識・技能】	関連:事前アンケート(Q1)
	めあて:自分にあったストレスへの対処法やほかの方法を考えてみよう。		

展開	さぐる	2, 色々なストレスの場面とその原因について考える。 ・無視された時 ・怒られた時 ・家のお手伝いが多い時 ・友達とケンカした時 T: 原因はなんだろう。T: その時の自分の感情は?	・自分が感じているストレスなどについて振り返らせる。 ・ストレスがかかった場面とその原因とあわせて, その時の感情も考えさせる。	関連: 事前アンケート (Q2) プリント①を配る。
	みつける	3, それぞれの方法の特徴を考える。 T: じゃあ, 心が気持ちよくなるために (ストレスを解消するために) どんな方法があるのだろう。	・多様なストレス解消法を交流し, 自分と同じ方法や違うことに気づくことができる。 ・	
学び(気づき): ストレス対処法には特徴があり, 人によって同じ方法や違う方法があることに気づくことができた。				
まとめ・ふりかえり	決める	4, ある場面を考えてみよう (<u>学校生活の中で共通する場面を提示し(見つける)で出てきた意見の中から自分が使いたい対処法を決める。</u>) 5, 授業での感想をワークシートに書く。【振り返る】	・友達との交流から自分にあった目標を見つけ, 意思決定することができたか。【思考・判断・表現】 ・次につなげたいこと等の視点を持たせる。	

⑤ 本研究のテーマから見る成果と課題

- 「つかむ」「さぐる」では, ストレスがかかる場面で自分はどうのように, 感じているのか振り返り, その原因について考え, 言語化することで「自己への気づき」に繋がった。
- 「決める」の場面では, 実際に起こりえる場面を想定しロールプレイを行い, 実践への意欲を図った。
- 導入部分で時間がかかったので, 事前の提示や発問を工夫し, タイムマネジメントを図る。
- めあての焦点化を図り, 児童らが何を学ぶのか, 明確に提示する。



写真1 検証授業1 板書



写真2 検証授業1 ロールプレイングの様子

(2) 検証授業2(特別活動 学級活動(3)2022年12月16日)

① 題材名

自分の役割って何だろう～一人一人が社会をつくる～ 【(3)ーイ 社会参画意識の醸成や働くことの意義の理解】

【SEL-8S】 H6 いろいろあるよ(ねらいとする能力:他者への気づき 責任ある意思決定 積極的・貢献的な奉仕活動)

② 題材の目標

清掃などの当番活動や係活動等の自己の役割を自覚して協働することの意義を理解し, 社会の一員として役割を果たす為に必要な事について主体的に考え行動しようとする実践意欲を育てる。

③ 本研究との関連

検証前授業での成果と課題から, 「自己への気づき」をもち, 検証後の授業展開においては, 本研究テーマである「自己有用感を高め, 主体的に学級や学校づくりに参画する児童の育成—学級活動やSEL-8Sの実践を通して—」での自己有用感の達成に向けて, 具体的な学級や学校づくりに参画する計画する授業づくりに取り組んでいく。

④ 本時の展開

(1) 本時のねらい

自己の役割を自覚し, 社会の一員として自分にできることを考え, 進んで実践できるようにする。

(2) 本時の展開

観点	児童の活動		◎指導上の留意点 (観点) 【評価方法】	備考
導入	つかむ	1, 今の自分の役割について振り返る。 T: 今, 学校や家庭, 地域であなたが責任をもって果たしている役割はありますか。 めあて: “みんなのために” 自分ができるとは何だろう。	・事前学習から, 今の自分が学級や学校, 家庭, 地域でどのような役割を果たしているかを振り返り, 自分の良さや成長に気づくことができるか。【知識・技能】	関連: 事前学習

2 主体的な学校づくりへの参画

① 委員会活動への取り組み

委員会活動では、高学年の全児童による活動を通して、異年齢の児童の人間関係を形成し、社会参画の態度を育てるという意義がある。本研究のテーマである“自己有用感”につながる社会性の育成に関わる取り組みとして、6学年を中心とした全校児童を巻き込んだ委員会活動に取り組んだ。



写真8 左（委員会室に学校をよりよく過ごすためのアイデア会議）

写真9 中央（運営委員と校長先生によるミーティング）

写真10 右（「あいさつクラブ」の活動／1～5年生までメンバー募集を呼び掛けた）

② たてわり活動への取り組み

今回、たてわり活動への取り組みにおいては、教師（学級担任）主導で活動を提示する場面を作らず、学級活動の時間に、6年生それぞれの学級の班ごとに活動について計画を立てさせた。計画や準備の段階で「低学年にはルールを簡単にしよう」「席は円にしてみんなの顔が見えるようにしよう」「黒板は飾り付けしたほうが喜ぶかな」といった活動のめあてを達成するための方法を模索している様子が見られた。また、教師側は「やらせたい」「やってほしい」活動ではなく、児童らが進んで「やりたい」と思う活動を設定できる支援をしていく必要がある。そして、計画・実施をする高学年が主体的に取り組める活動になっているか確認し助言をする。振り返りアンケートを行い、児童に「人と関わることへの喜び」を実感させ自信へと繋げていく。最後に全教職員が「異年齢」で児童が育つ家庭を正しく理解し、適切な対応ができる仕組みになっていくように、児童会担当として職員会議への提案や学級に活動のめあてを掲示してもらう等の継続した周知徹底を図った。児童はこれまでに、10月28日（金）5校時に実施した、たてわり班活動を通して、学年や学級が異なる児童と共に楽しく触れ合ったり、協力して活動に取り組んだりして、異年齢集団におけるよりよい人間関係を形成する活動に主体的に取り組む、学校生活の充実と向上を図ってきた。たてわり活動での振り返りは以下の通りである。また、たてわり活動掲示板や昼休みにたてわり班ごとのレクの計画等、継続した活動に取り組む社会参画の素地を図っている。振り返りアンケートは以下の通りである。

表2 たてわり活動振り返りアンケート Google formsにて（回答者 6学年 71名）

設問	できた	まあできた	もう少し	できなかった
たてわり活動の目標①「仲間とのより良い関係をつくる」は達成できましたか。	27名 37.5%	22名 30.6%	15名 20.8%	8名 11.1%
たてわり活動の目標②「班の一員として、楽しい生活づくりに協力すること」は達成できましたか。	26名 36.1%	27名 37.5%	10名 13.9%	9名 12.5%
たてわり活動の目標③「自分たちで活動を考え、計画し、実践できる」は達成できましたか。	29名 40.3%	18名 25%	9名 12.5%	16名 22.2%



写真11 たてわり活動の様子

写真12 たてわり活動 掲示板

写真13 昼休みのたてわり活動レク

③ SEL－8Sへの取り組み

本校では、毎月1回「スマイルタイム」として継続的にSEL－8Sの授業実践に取り組んでいる。また6月17日（金）には、下向絵里先生によるうるま市指定示範授業を本学級にて実施した。毎月のスマイルタイムや特別活動と関連したSEL－8Sの授業実践を取り組むことで、より日常生活を意識した授業実践に取り組むことができた。



写真14 2022年6月17日 下向絵里先生による授業



写真15 毎月のスマイルタイムや特別活動の振り返り掲示



写真16 SEL－8S D4 みんなで力を合わせて

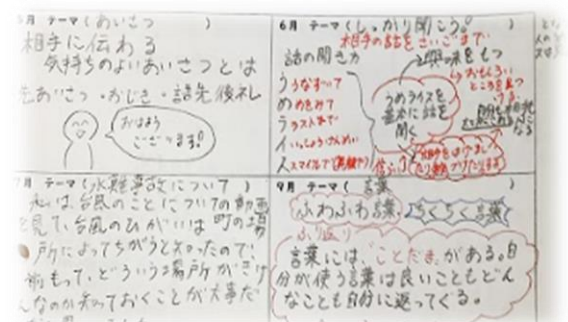


写真17 スマイルタイムの児童のふりかえりシート

VI 仮説の検証

仮説1 特別活動で身につけたい資質能力とSEL－8Sを関連付けて授業の工夫を行うことで、個々の児童のSEL8－Sにおける基礎的・社会的応用能力の向上を図ることができるだろう。

今回、児童の実態を把握するために「SEL 8つの能力」アンケートの比較を行った。（児童生徒による自己評定SEL－8研究会 HP）アンケート項目として、①「自己への気づき」②「他者への気づき」③「自己のコントロール」④「対人関係」⑤「責任ある自己決定」⑥「生活上の問題防止のスキル」⑦「人生の重要事態に対処する能力」⑧「積極的・貢献的な奉仕活動」となっている。各項目においての学級の実態は以下の通りである。

能力	自己評定 1回目	自己評定 2回目	増減
自己への気づき	49.7	52.3	+2.6
他者への気づき	51.7	56.5	+4.8
自己のコントロール	54.2	53.8	-0.4
対人関係	50.7	52.9	+2.2
責任ある意思決定	49.4	50.9	+1.5
生活上の問題防止のスキル	45.4	52.1	+6.7
人生の重要事態に対処する能力	49.2	55.3	+6.1
積極的・貢献的な奉仕活動	46.9	52.5	+5.6

表3 「SEL8つの能力」6年3組 比較アンケート結果

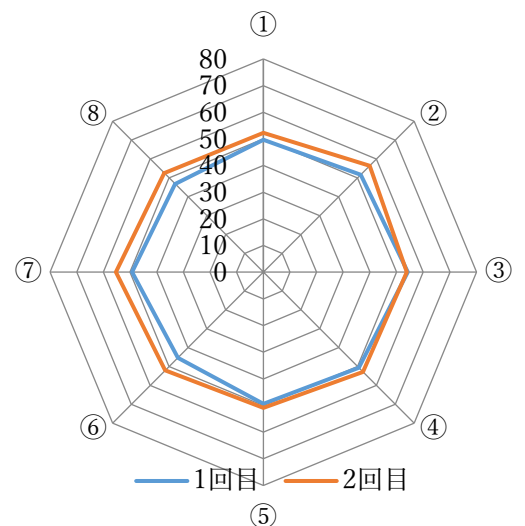


図2 「SEL 8つの能力」6年3組 比較アンケート図

<令和4年度 うるま市教育実践>

アンケート結果より、第1回目と比較して全体的に数値が向上している。特別活動でみにつけたい資質である「人間関係形成」「自己実現」「社会参画」のそれぞれをSEL-8Sと関連づけて授業実践することで、より日常生活に生かすことのできる学びができたと考える。また、係活動や当番、委員会活動を通して他者への気づきを得る場面が多かったことから、社会性と関連する応用的社会的能力の3つにおいて+5%以上の数値の向上が見られた。しかし「自己のコントロール」においては、分かっているが・・・という自分自身との葛藤も高学年という発達段階において芽生えていることも結果から読み取れる。

仮説2 特別活動での学級活動や係活動や委員会などを通して、主体的に学級や学校づくりに参画するために必要な、自己有用感を高めていくことができるだろう。

1 令和4年度 沖縄県 第1回・第2回 沖縄県児童生徒質問紙 回答より

本学級では設問(1)「自分には、よいところがあると思いますか」について、第1回の県全体の結果から-2.8%となっていた。第2回目では、県全体を10.7%上回る結果となった。自己に関する評価は、自己有用感の基礎となるため、自分に自信を持つという心の素地をつくるために学級活動での話し合い活動やSEL-8Sでの自己や他者への気づきの授業を実践することによって、向上したのではないかと考える。また、他の設問においても肯定的な回答の割合の多さが結果として見られた。仮説2「特別活動での学級活動や係活動や委員会などを通して、主体的に学級や学校づくりに参画するために必要な、自己有用感を高めていくことができるだろう。」関連する設問においての変容は以下の通りである。【回答者：本学級に在籍する男子17名、女子16名の計33名】

設問(1) 自分には良いところがあると思いますか。(自己有用感における自尊感情・自己肯定感の変化)

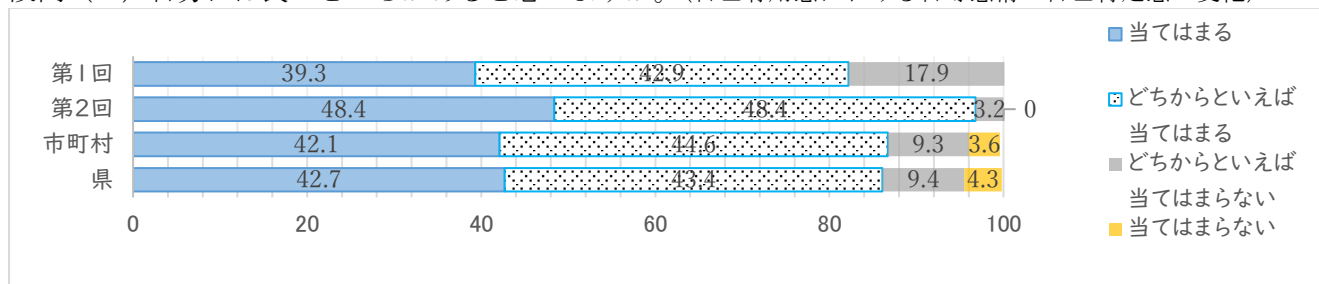


図3 設問(1) 第1回と第2回の比較結果

設問(3) 学校に行くのは楽しいと思いますか。(他者との関わり, 社会参画)

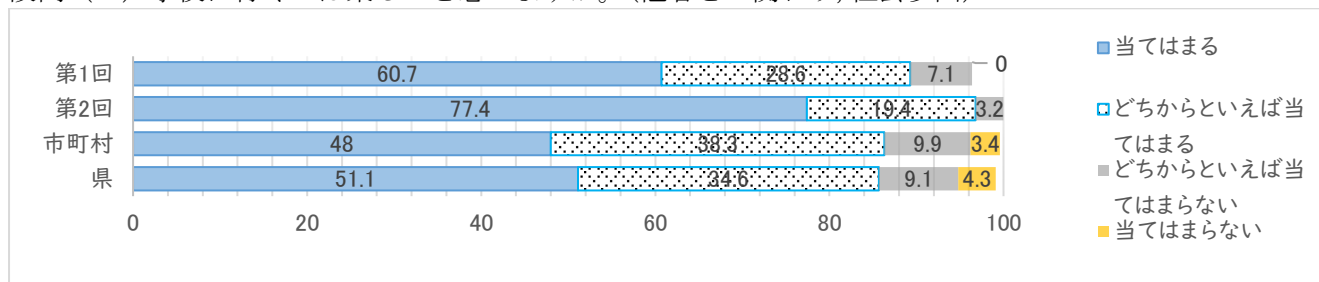


図4 設問(3) 第1回と第2回の比較結果

設問(4) ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがありますか。(自己有用感と達成感)

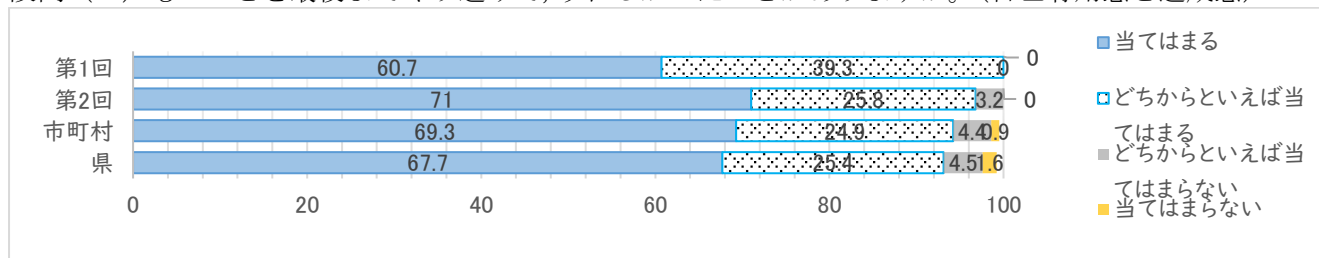


図5 設問(4) 第1回と第2回の比較結果

設問（6）人が困っているときは、進んで助けていますか。（他者貢献と自己有用感）

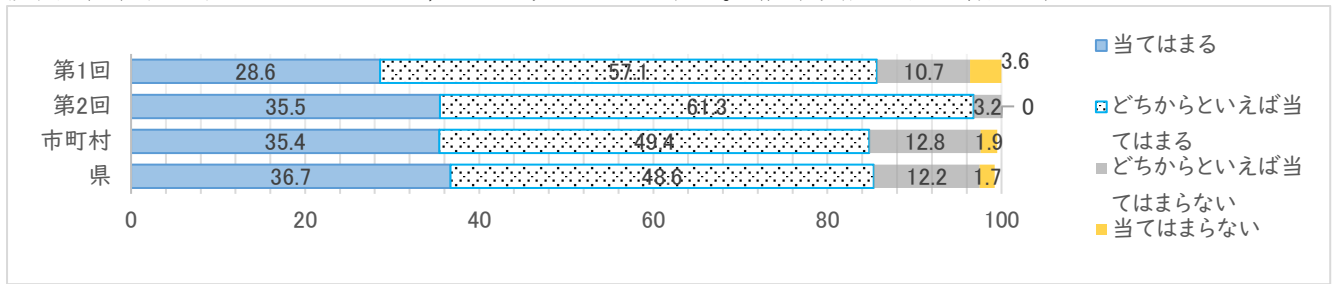


図6 設問（6）第1回と第2回の比較結果

設問（13）学級みんなで話し合ってきたことなどに協力して取り組み、嬉しかったことがありますか。（人間関係形成, 社会参画）

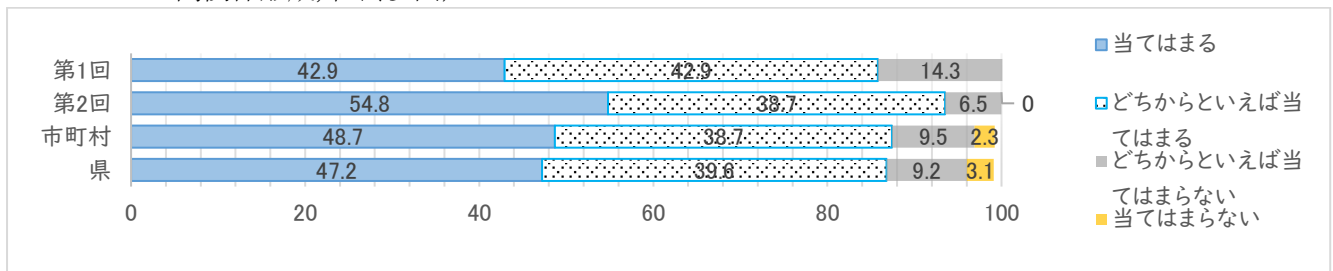
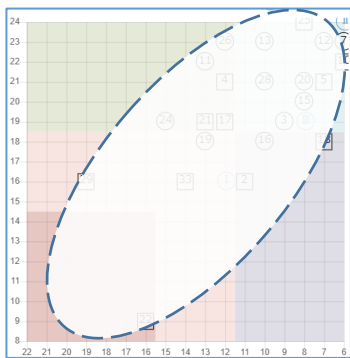


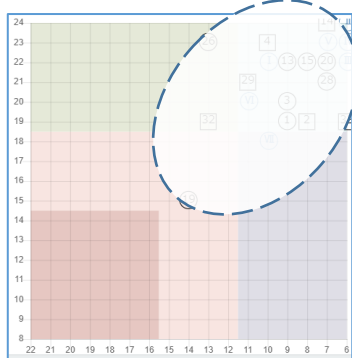
図7 設問（13）第1回と第2回の比較結果

2 WEBQ-Uを用いた学級の実態



1回目「かたさ型-固定-遂行」

図8 WEBQ-U 6-3分布図(6/20実施)



2回目「親和型-安定-創造」

図9 WEBQU 6-3分布図(11/14実施)

WEBQ-Uの結果は、1回目「かたさ型-固定-遂行」となっていた。始めに特別活動の学級活動を基礎とした話し合い活動を、各教科においても3~4人の小グループ（不安なく関われる少人数）で設定し、取り組んだ。また、本市が取り組んでいるSEL-8Sの授業実践を重ね、児童らの人間関係の基礎をなす社会的能力の向上を図った。要支援群にいた児童に対しては、「結EN(IN-Child Record)」にかけ、個別の教育プランを作成した。

2回目の結果は「2回目「親和型-安定-創造」となり、それぞれの群の数値に変化がみられた。

表4 WEBQ-Uを用いた学級の実態 比較表

	1回目 (6/20)	2回目 (11/14)	全国平均
学級生活満足群	53.1% (17/32人)	84.4% (27/32人)	43.0%
非承認群	9.4% (3/32人)	6.3% (2/32人)	16.0%
侵害行為認知群	18.8% (6/32人)	6.3% (2/32人)	23.0%
学級生活不満足群	15.6% (5/32人)	3.1% (1/32)	18.0%
要支援群	3.1% (1/32人)	0% (0/32人)	2.9%

学級生活満足群が+31.3%、非承認群は-3.1%となった。また、侵害行為認知群は-12.5%と大きく減少した。学級生活不満足群も同様に-12.5%と減少した。この結果から、仮説2「特別活動での学級活動や係活動や委員会などを通して、主体的に学級や学校づくりに参画するために必要な、自己有用感を高めていくことができるだろう。」において、活動を通じた人との繋がりを実感し“人と関わることは楽しい”という経験を獲得し、自己有用感の高まりから規範意識が芽生え、学級という小集団における支持的風土の醸成に繋がったのではないかと考える。今後の課題として、侵害行為認知群・非承認群に位置する児童には、関わりのスキルへの手立てを行い、声掛け支援の継続などの、個別の教育プランを作成し対応していく。

Ⅶ 成果と課題

1 成果

①研究仮説からの検証

特別活動の3つの視点を意識した取り組みから

「人間関係形成」・・・学級活動（1）での活動やSEL－8Sでの学びから話し合いの進め方が合意形成の図り方が身についた。

「自己実現」・・・・・・自己の課題を捉え、友達の良さや頑張りに気づき、互いに認め合えるようになった。

「社会参画」・・・・・・係や当番活動、委員会活動を通して、よりよい学級・学校づくりに主体的に参画し、その中で自分の役割を自覚し、取り組み、認められることで自分の存在感や自己有用感を高めることができた。

②各種アンケート結果より

本研究では6月のWEBQ-Uでの児童の実態から、ほとんどの児童が自己を肯定する力があることを見取ることができたので、社会性の基礎となる“自己有用感”に着目して仮説1,2を立てた。本校では特別活動を校内研修として学校全体で取り組み、「つかむ」「さぐる」「見つける」「決める」といった特別活動の見方・考え方を基礎とした教科横断的な学びを実践している。そのことにより、普段の授業の中でも児童らはペアやグループ学習を積極的に取り組み、話し合いの進め方や合意形成の図り方を身につけ、主体的に学校生活を送っている様子が見られた。またWEBQ-Uや沖縄県児童生徒質問紙より、どちらとも1回目の結果と比べ全体的に数値が向上していることが分かった。

2 課題

①自己有用感について（各種アンケートより）

仮説1,2の実践を通して、自己有用感の向上には個人差がみられた。その原因として、自己を肯定する力に差があることが各種アンケート結果より把握できた。その中でも“自尊感情”という、自分に対する自己評価が著しく低い児童においては「他者と関わる」という、これまでの人間関係の経験が少ないことが挙げられる。どの場面で、どのような行動や言葉が自分と相手にとって良いのかという、ソーシャルスキルの習得から始めることが、より全体での自己有用感の向上につながると考えられる。「自己への気づき」という自尊感情と「認められている」「必要とされている」などの実感をもてる学級経営の向上が課題として考えられる。

②SEL－8Sと他教科との関連性

本研究では主に特別活動とSEL－8Sを関連付けた授業実践を行った。しかし、SEL－8Sの内容自体は社会性のスキル獲得を目的としたものであり、児童らに身につけさせたい能力が知識や技能に偏ってしまう。スキル習得やロールプレイングのみの実施で一時的な学びにならないように、教科横断的な視点から、各教科のねらいとSEL－8Sの内容の一部を関連づけるなどの授業実践の工夫が必要だと考える。

<参考文献>

- 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 「総則編」文部科学省
- 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 「特別活動」文部科学省
- 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 2019 「特別活動指導資料 みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）」文溪堂
- 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 平成23年6月 「子どもの社会性が育つ「異年齢の交流活動」－活動実施の考え方から教師用活動案まで－
- 小泉令三 2011 「社会性と情動の学習（SEL8－S）の導入と実践」ミネルヴァ書房

<参考WEBサイト>

- SEL－8研究会 <http://www.sel8group.jp/index.html>
- 文部科学省 国立教育政策研究所 2015 生徒指導・進路指導研究センター 「生徒指導リーフ『自尊感情』？それとも、『自己有用感』？（leaf18）」
<http://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf18.pdf>

【別紙資料】

①SEL8-Sとは、(Social and Emotional Learning of 8Abilities at School)の頭文字である。基礎的社会的能力とは、対人関係において基礎となる社会的能力である。応用的社会的能力とは、5つの基礎的社会的能力をもとにしたもので、より複合的で応用的な3つの能力になる。

	能力	説明
基礎的社会的能力	自己への気づき	自分の感情に気づき、また自己の能力について現実的で根拠のある評価をする力
	他者への気づき	他者の感情を理解し、他者の立場に立つことができるとともに、多様な人がいることを認め、良好な関係をもつことができる力
	自己のコントロール	物事を適切に処理できるように情動をコントロールし、挫折や失敗を乗り越え、また妥協による一時的な満足にとどまることなく、目標を達成できるように一生懸命取り組む力
	対人関係	周囲の人との関係において、情動を効果的に処理し、協力的で、必要ならば援助を得られるような健全で価値のある関係を築き、維持する力。ただし、悪い誘いは断り、意見が衝突しても解決策を探ることができるようにする力。
	責任ある意思決定	関連するすべての要因と、いろいろな選択肢を選んだ場合に予想される結果を十分に考慮し、意思決定を行う。その際に、他者を尊重し、自己の決定については責任をもつ力
応用的社会的能力	生活上の問題防止のスキル	アルコール・タバコ・薬物乱用防止、病気とけがの予防、性教育の成果を含めた健全な家庭生活、身体活動プログラムを取り入れた運動の習慣化、暴力やケンカの回避、精神衛生の促進などに必要なスキル
	人生の重要事態に対処する能力	中学校・高校進学への対処、緊張緩和や葛藤解消の方法、支援の求め方(サポート源の知識、アクセス方法)家族内の大きな問題(例:両親の離婚や別居)や死別への対処などに関する能力
	積極的・貢献的な奉仕活動	ボランティア精神の保持と育成、ボランティア活動(学級内、異学年間、地域社会での活動)への意欲と実践

SEL-8Sについての構成図①



授業実践例①

各教科でペアやグループでの交流がスムーズにいくように、話し合いのスキルを身につけたい

学校行事

意思決定

人間関係形成

話し合いのルール

グループで話し合う時は、ヒジの向きを揃えましょう！

- 1 賛成しない
- 2 自由な発想OK
- 3 (みんなが)納得するまで話し合う

D4 みんなで力を合わせて【ねらいとする能力:自己のコントロール、対人関係】=特別活動(2)イと関連